時代
摸画

俳家奇人談

上

へ5
2250
1

笹新

萬源

文庫

ヘ15
2250
1-6

俗家奇人伝跋

抑人心頭の不
抜の風流を抜ぬきをあやまちて又
言ふまじきことをあやまちて悔を考ふ
あるか道かなる中間に
はまるまじきことを志うも情実の
楚言世のかたちを
おほえたるかたちなるを
奇といふべきことをもとめるもの

ちかくよしてこの好るすぢ道ことに
清し此編にあつめ給へるな
志らなれりの句兄を読つる人の
よくおもひつきぬへて或はいうふ
ちとまうしなと右乃一筆を添る事
しかなり

雪中庵完来人

完来

刻俳家奇人談序

曩に閑田子近世畸人伝集録し一載て世に出す詳ら
かなり来者これありといへども僅を盛を継ものあらん
竊に惟みるに永正天文の比に守武宗鑑此清操
あり寛永正保の中に貞徳季吟乃卓挙あり延
宝元禄の間に宗因桃青此逸群あり且其一為我
貞室立圃重頼随徳言水其角嵐雪去来丈艸支考
許六北枝惟然来山鬼貫乙由不角原松淡々等此一奇
あれく世間に雑出する時は俳家すも亦その人多しと

いふ所うゝ茲に先人玄玄一遷移あり至俳奇我好む
者の為に輯す所の八十有餘淡墨拙要ならずや古人
九泉の下我業を知り也又各匂に至風韻の変
を識すに所り今也四里に類しを之を俳家奇人談と
いふ後来君雅宿幸に濂楠摸索九羅我昭ずんい僕が
寥濯の中の見て忘加んや于皆文化丙子孟歳
初春蓬屋小筆を操所

儀俳閑人書書

蘭雪堂藏書

俳家奇人談序

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比之彼詩
與諺者俗而叶音詩者雅而有韻固其
自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質
已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人
情固同之若其詠之人意有雅俗而其裁
言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者
俳句與諺固俗而裁有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也竹内勾當玄玄一者所謂目雖盲不盲于心而居常好俳句其詠四時景象言人事喜戚閑適之趣淡薄之味往往使人有無限可感者不為不多矣纂而輯之名曰詠物句選云玄玄一嘗曰古人之言俳句者不少而欲尚友其人則不可不知其意匠事蹟也於是乎廼撰有其美名佳句而事之可以賞者而遂成編名之曰俳家奇人談其子再校而刻之以継其父之志豈不懿哉苟世之言俳句者讀之辨今古之文質知意趣之雅俗則有復裨益于風教亦以為不少矣古人有言云誦其詩讀其書不知其人而可乎是以論其世是尚友也玄玄一其有感于此者也乎是為序

文化乙亥秋九月既望

江都　臥舫散人譔

たまりをわきまへしむ其なる士やよく
心をとめて物録するあれはかゝる家集を
ほめて筆をとらしむるまで評言をかつて見
きくの中にもすぐれし年秋八月そのかみの翁の語吐を
あつめおもひ出るにまかせて是を編てむかしの人を
つぐるに足れりとして墨をおそれながらも書く
道に木の葉のちりぢりなるを集めてかきあつめ
編をなすにいよいよくやみの事も心なきしと
なる事終ておもふに猶しらず編集の是道をたゝ

まつせしふる事也まさに伴ひしもあるよし
きけるはつれしいまだ俳家一曹の事譚清標を
えらむ冊子はなくて唯ことを集めて見る故
世におこなはるゝものみえざりし人は風雅の心なき字
事の始ども集めて寛政につきあたりものを
いましめなかつゞきの事ども綴り十余家の家ち
抜萃のいさゝか探しまゐらす名家は洩しもれて
かわそれの一事たまたま毎のそれをあらはして出さ
人まなびしたる何をいふつもりの名をば所あらはす

[illegible]

八尋園宗松

九例

一本文引用する所は出ハ謂ゆる法帖叢集紙麻雑紙名類
故く数百部一云事句とといへども変化原時ハ求め
ざるべからず又偽吹の正紀を知人ハ殊て此を詳に
一雲載在する者を上文に記すあり下あるに斜に古今紙
後八十餘家名自の高彩風顔紙志らしむ
一此出性筆小隠く年代は次序ハ拘ハらず風その偽名
委曲原源ハ家く拙世紙ハゆつ墨く茲に器に素より
風流を学ぶ者と共れバなり
一文学性徒本山捨女千代は属を拙閑田ヶ紙する和と歌器
長ありは徒ども空言ヶ現実ヶ鬼んと証せば必らず
言出と互考すべし

一江戸に募て得る変古画賛短尺巻懐等並びに友人
紹介の筆を借除色亦其旨意を解するの一助家
ゴ〜や観る人それ諸我恩へ

蓮廬書書識

俳家奇人談目次

上之巻

一宗祇法師　一荒木田守武
一山崎宗鑑　一松永貞徳
一杉田重一附　英清女　一野〻口立圃附　暁水
一松江重頼附　春流　一高瀬梅盛
一山本西武　一鶏冠井令徳
一安原貞室附　元次　一北村季吟附　湖春
一齋藤徳元　一石田未得附　未孫

一高鳴玄札附　山夕
一荒木加友
一半井卜養附　慶友
一池田正式
一芳賀一晶
一中島貞宜附　二葉
一神野忠知
一田氏捨子附　盤桂禅師
一池西言水
一西山宗因
一井原西鶴
一椎本才麿附　圓水
一西口常矩附　常長
一田代松意附　正友
一菅谷高政
一伊藤信德
一上島鬼貫
一園女附　惟中

一小西来山附　由平

中之巻

一松尾桃青
一榎本其角
一服部嵐雪附　烈女
一向井玄来
一僧文草
一森川許六
一東華坊
一曲翠附　破鏡
一惟然坊
一勾空
一秋元坊附　李東
一磨工北枝
一僧浪化
一僧千那

一小川破笠
一梢風尼
一鯉屋杉風
一越智越人
一胃良
一知足一家
一山口素堂
下之巻
一中川乙由
一舎羅
一路通
一智月尼　附　乙州
一曙坡
一涼菟
一原田宇古
一生駒萬子

一霧川
一高麗百里　附　琴風
一秋色
一水間沾德
一大浣三子風
一梅路
一加茂原松
一松木淡淡
一活牙舊宝
一深川湖十
一紀文親子
一櫻井吏登
一菊屋沾涼　附　行尚
一立羽不角
一大高子葉
一素岡貞佐
一堀内仙崔
一清水超波

一 不睡巴人　一 横井也有
一 千代女　一 山口羅人
一 建部涼帥　一 遊女談
通計目次八十有六談
一 玄玄居士勝信 附 今世名家發句

俳家奇人談巻之上

竹窓玄玄一遺稿　男蓮麿書　叅行

宗祇法師

宗祇法師壮年出家京里しゐあり庶ひと年　強く連歌の
ふを残閑まゝ借いう京崎十年間しゐ連奇ハ廿年ハ
功を積けれ玄妙ハ到至雖しゐ答ふ便いはく我らバ十年
益衆勤ふ如何と或人ハ云ハ何ハ我ら及ぶ而ハ何ハ
ずと感せしゐや漢ハ相如ハ曰十ゐて始く孝経を読
唐の高適ハ六十ハしゐ初て詩歌作成ければ世人ら連奇
達きゐ京宮ふゝ侯や成ハ侍丹の鬼貫ハ是を称しく
崗時雲双ゐゐ紙せ里或時近隣ハ離座ハ至ける侯ちそも
屋ハ隠ぐ一摩何叔若はらみ女の奇怪ハ京宗祇一二ハ流亡

さんの細とくと宗長は紹しけるが宮ち男子をお生せり又時宜　帝の瘧疾悩ませ給へるに世更の逸奇して法全快賜ひしるなり玄妙境よ入る紀い玄家時を法と少あるべ玄號を種玉庵句徒秋とゝめ何年の年ふり有け む仲秋三五は絶一天深雲かゝ里月の宴ゆゆげる我歌く「云ゝ世の月を雲らる今昔ふ今歌う赤は句古今歌法よく人の通する而ゆり又逸懐して世よ嫌るハ交ふ時西の宿う赤芭二條院濱波の古奇ふ倍しや吟ふり後よ蕉翁宮に感服して世は中ハ交ふ宗祖の宿うなとゝ暮れより有よ板風を沙君添ハ彼法沙我宗ゝく玄一生は営ゆなる添屋しゝ 玄俳倍ふ文庵二年七月お初湯中は宿舎に寂す巣八十有二世を辞す涼の奇「はうふしや鶴の林の煙つも玄をくれぬる寂さを暇む生

荒木田守武

荒木田守武ハ伊勢内宮の祢宜赤ゆり和歌逸奇我好く一時ふ名あ里武月逸奇興ふ君席よ恨しふ宗法俳の人くなれば「古産愛を尺生だ何れを加みふ宗祖傷ゝ玄く「云ゝわ雲れは姫里焉帽子着て毛附らゆ一ハ殊よ興ゆ里てゞ尺元ゆる嘗く童子教誡は為よ一夜百首を添ず一ゝゞに世中君二字我押ふ芭我世中百首ゆふ又國人ゆる重して伊源海俳ゝゝ称せり且俗潜は鼻祖ふ里元日や神代のるも思ゝゆ「撞子や裏野君原の落しゝ種ゝ我は洞高尚人の及ぶる而法為獨吟ふ句を玄ふ玄雲頭よ「飛梅や軽く〳〵爰を神はゝる今ゝ我筋我漢よ不易ゆ什爰しゝ眞味之後来金一国め答名家を出すも時人我ふく勢陽は株梁ゝ玄ふ玄ふ爰む屋しゝ

寸武靈像者摹往時所崇於
度會外宮之真而其門
葉之所傳也先乾什
素山其泓嘗師爺
難點止附與沾洌
沾洌授之雪齋
後莫知其所在后乾什
索求而得之云爲其古物可知也今取
以圖焉　蓮盧青青

世小「菊」茂我高堂の面影仏とゆふへ哉（江戸亀屋源左衛門西行法師の句筆の短尺より芭蕉翁小てそのの句なり）
我世わ天文十八年八月辛巳に婦世ゆ歌「越ゆとも又切来
神流山峯は雲風峯の松風殺句「殺」小今日も見ゆふん
我世加京

山濤宗謐

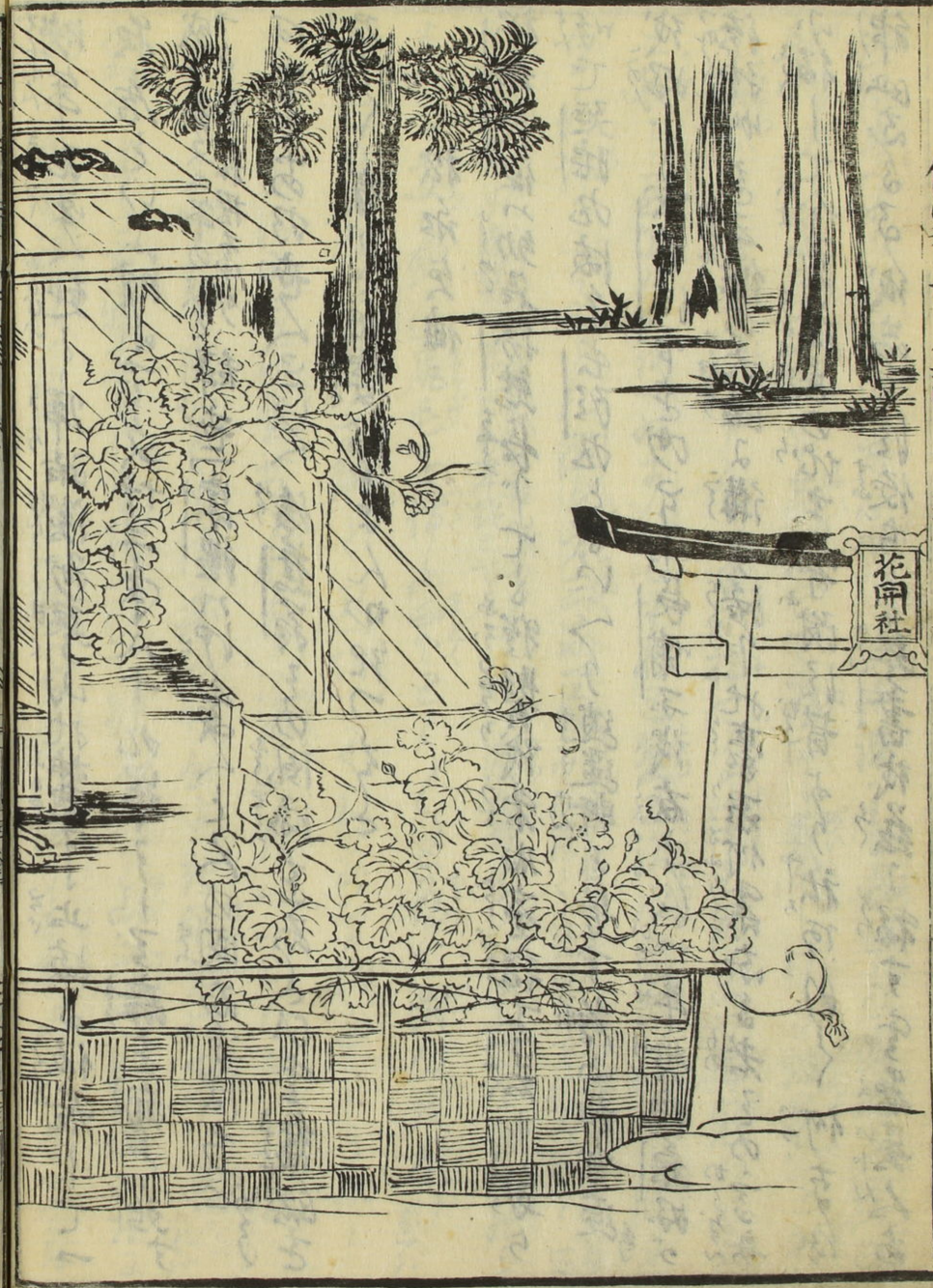
山濤宗謐ハ近江物部人也姓支那氏ニ〻代〻足利家の
臣たりし長享元年佐々木高頼上洛ときに古樹義尚ニ〻
ら兵を帥く追討ー捕利を得承同く二年宗内よりて
内大臣小任ぜられ義熙と改む延徳元年義熙怒業ありず
ー逆ー乱ー悪ー時小支那氏廿五業主浸の別我怨み生より
殺仕ー主利数ー掠物厄ヶ濤ヶ位ー後嫌別山濤は竹林ヶ

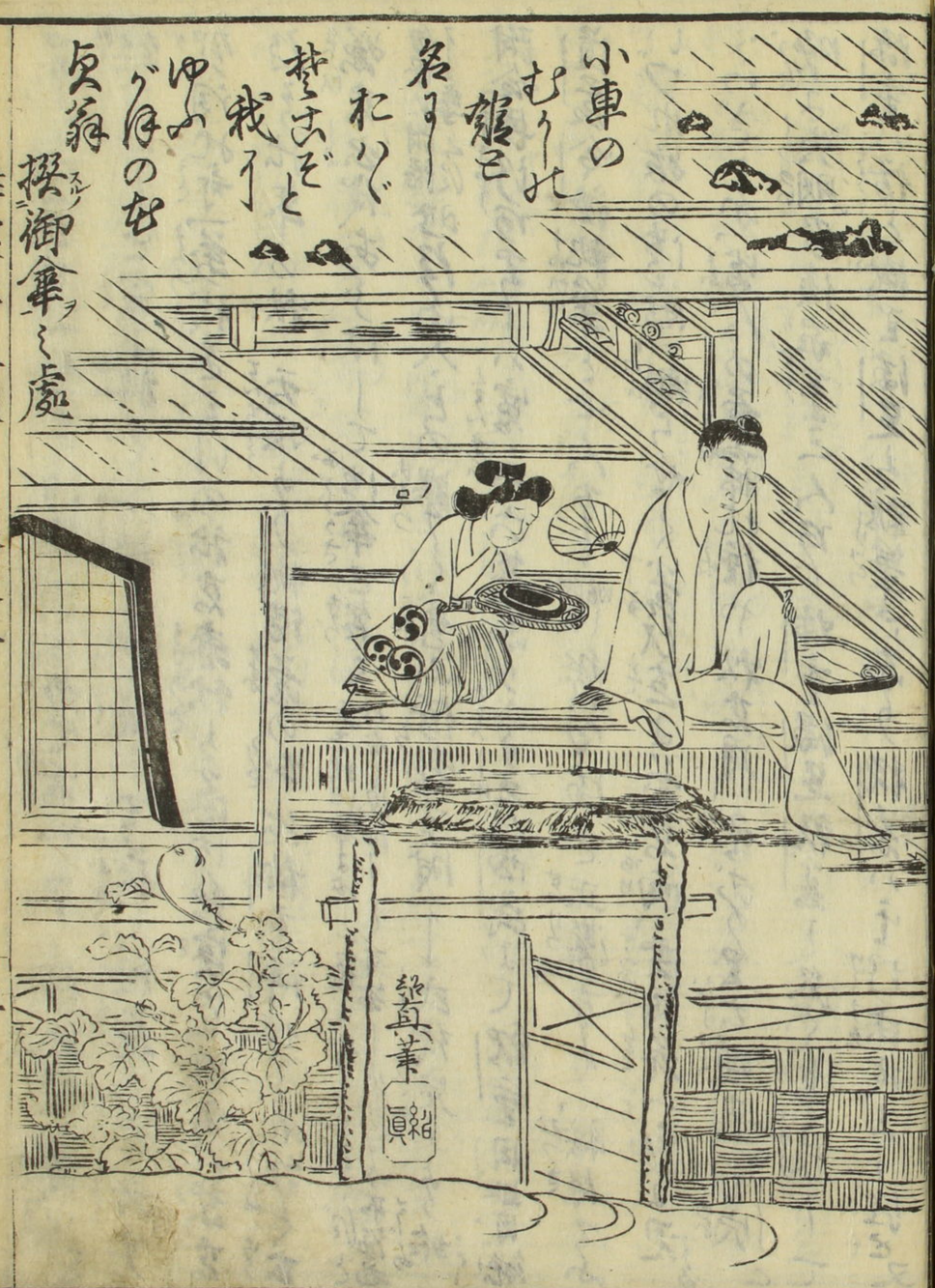
遺逸素より和歌連句を嗜し又俳諧も出ざり成時遺逸院
殿に寒陰（宗長法名）も参侍て当座の烟草を形
て献上るの句に法師して「手小指てる姿を見まば鍾馗つかと
と異じ玉ひける後「けまんとすれど髮の沢水宗長「蛇ぞ」遺逸
宇何地ぞ（るぶん遺り米三斗里業ずるに紙俗集俳諧句解延宝四年
長り紙を遺とたる紙谷吾山ものしたれば滑稽句を準拠せり宗長法名を龍山公と宗
志むる変り或人「尾毛を借ふ雪とくくと為て附句後生け
「水鳥の尾羽れ寄けさ解く又「切らくも有里切命くもふし
といへるに三句而至せぶれ「盗後ふ（て足ま）び我子
「けぶりある月紙かくせ法師の校「ひよ紀的矢れ「出い
数句法と古雅あり「手後ついて歌おうよる懐ふ「摺小本ま
志ら法師蓼れ花ちり「傘を忘ば雨ふもおよ夜半宗長

時年西行遺逸院御琴山れ禁止る仮居して一
和歌といふ時かつ又廿二年八十九業ふ病く死す
或る説又二年の奴と辞世「宗遺ハ沖雲人と人の問ふばちと
ひまてあり世へこと「後蕉翁ふの風流を志ひ雪舎流を
居く「有ごと紀姿れ「ごまんか紀つ

松永貞徳

松永貞徳ハ幼名鶴熊長じて髭髭後朱雀を慕し句ら
嘯で延陀丸法名出丸ともいへり遺逸軒と号す俳諧和歌連句
後好く玄旨法師を学ふ長嘯子後ふ一年俳諧好ぶ
法弟を三條の大路に講す洛中は豪家何業ある者ふの
小猴して今古詩歌の地を寄附に昔より社ひりく何ふ
祇此ふるる紙ふ俗ち雪駆書後茲に稼す雪長吳人あ


花開社


小車のむらさき
龍と
名ゑ
わたり
梦さめぞと
我了
ゆめ
ぐさの女
貞蔭
撰御筆ゝ處
紹眞筆

星くに つらぶ一句を備す爰はめて思一らく神武以来我道を
起すべし　宣小樵く小袖を結搦して花鼠稲荷と奉称す
賀河北奇一第代をうつの祇園春秋をうつ紀宮なる礼云社禁宮
住うち社年の秋　天頂より俳諧宮の本弘称を評せられ初く玄
蟠宮出我あらはして傳傘と名く　天子北傘より出して傳一令よりの京と
句樵の附語　了季　俳　住小入らの響く　笠小侍牧す時く　武我定　ら始く
附合　畏以可里　ハ寛く那六年　ら　今立ハ西武より釈重因如日紙
道長　令徳軌筆と七人ら　附合　殺句備と正潔ら　膝付ふ
いづれ始の法と時一辞らせく　宮比古と宮雨一雲月花一陵よ現
らつぎくふ一皆人の宮六藤北種や秋宮月一　ざの里古蟠よ　穴
晩よ失明の後宮重二人ら　弥重濃足祝宮と名く年長ら　て
弥重八俗と感里濃足ら軌筆と　ら祝宮い生ら未城ら　ら又

可第の俗な里何生の年ら　や有けん　ら　ら　て竟徒釈生より
大佛阪北南北才許多を湯里くみ川ら　ら果樹我捧名
榜をおして抹香と名く中小報恩花ら絢るに妙種
千部子尋の筆我以す義ら　ら　ら　ら奇仙上宮太子蓮譜大沙人北豊之北第式紀定家等の六人ら　ら
像を画く　ら　ら吟宮房あ里詩奇蓮低宮短尺を集む宮
小芦北北屋簾宮を以く田に通ら方域東西武十百南北三十
百蓮蘚すら小皆竹を以て宮今圖あ川字生撞板を存
せり生権貴小幸せらるる宮と世翁の須徳ら承慶二
年小以宮寿八十三辞世の幅一昭日ハ彩宮時ら杉りいーるる
今ら杉ら宮ら彩体世のふいう宮貞翁はどめ大志ら
俳宮我殺紀す羅山草山の森子を以くつ人と古宮且宮南
重杜貞宮西武梅風宮今徳季吟徳元未滑玄札一雪安静宗

時に茨松堂定室等みな宗匠なり嗚呼盛なる哉

松田定一　附　美津め

松田句當定一は勢陽神路山に禁廉して居せり生性十二津の調子に能く琴の美音を知ふ彼城清こうといふ我　朝の沙驥なる稲一つ屋一懐抱は身武ゲ俳風を慕ひ遠く我俗ずるを在江ゲめ一老後出一貞徳の流制をとり文一とぞ定句出

殊に文えるは「咲の花の色香ゆかれこれ紅く定

尊をゲ系松脇」「松ばりうう雪篠や周の雨思ハばりき世時

ホ一て是妙なゆんとい寛く水七年六月八十三歳にて死

つ人美津めと同じ山田松本茂左衛門妻にて俳諧忠妙子なり

「嗚ホ哀天第ハゲ何ゴ杜宇」「右ゲうり去れ奴蕨に手出ゲ

つより松坂の墓めを出きり

野口立圃　附　嘯水

野口立圃初名秋重保姓雑賀市左衛門家光侯の

臣領ゴ近く平生お入一て賜和奇出ゲ

等殆秋重より出法を傳ハ里特殊探尚より再別城坂うえい

ういい元ゲ長ずるれ点つ言足の才子ゲり「八雲北隆を」似せを

茂宮茂「行水や汗を埃ふ夕稜」「山姫と絶ふい名ゲや立田姫

「屋ホ内ハ」さぞ宗落拙ふを東山世人嘘草生」豊臣の法政ゲ北義の天

など異一玉ひ一ハ生性の偏屈なる窓ゴ夢想少ホをきゲ

を出一るを一点切ゲ出ゴ洋ゲ偏撰一て後世の軽別とゲふ江蕉翁もふ

ゲく是城稱せらるる弘ずる時第七十一貞文九年九月ゲり詩

世「月茂の三句見を今ゲる世ゲ」

書本嘯水を立南門ゲ一く必拙筆と号江「玄来る年の歩

みや魚千里」「宝嘯の狙俗を習ひて窓北拙」「今日北月霧も

後川稲禁り赤「初づり蟹後姿や干潟遠小波」言を継ぐ
俳諧形式を著はし享保十八年小死す

松江重頼　附　玄淵

松江重頼俗名太文字屋治右衛門俳名維舟といふ京師小路を住
習ひ玉風体まねと玄国と俳仲すべし一彼岸にて慈恩寺参詣
茶もゞ赤「昨日の椿ばうを伸く箒哉」秋やけさ一見よ知恩
拭い椽「料理河豚残小魚赤小」椿ともなし此子生得遠寝て
同つと交を絶さと牧多赤小寄々永の涯ゝとよ太子集を撰す
原時玄甫「蛍火を河辺せなり北条」赤小「ゝる白桃加入ちん
桃杖む杖沙の白「蛍火を路中の乞同孫ちれば夜甫此ゝ桃
沙小伝ふ沙を白孫より後ちまるよ」遠られけ是ごも遠ゝ
仲高せ世を笠小俗ゝ沙井北初み姑く絶ゝ杖遠ゝ此を眠を

他日甫桃害せんと計る沙蓬さ小を笠く俳才ちく甫ちも動
常せり又毛吹此桃作小る時弘山の西式とも手柄よれよぶ
あ里氏流小江戸又白蛍亡母の追悼ゑ「禁ちを芭北翠ゝ蛍れ俳の発と
いふ白桃ちせるの小杖ゑ書を織小るよりの不快とい成ちり杖
蛍が裏の俳を「羽部ちを日まけ桃ゑてやはちゑ一げといはば
ちみける蛍此を笠ゝ「遠ちを芭北ゑの大文字とい中ちる
此白前表と成ゝ一や此ちを百ちゑく身俳ちり如延宝八年七
十四巻ちり

書本玄淵ハ初め重頼の門ゝて後貞徳弟子ちゑ俳風成ちい
杖のつ法ゝ一重巻重才重好重矢ちり巻桃四重とつい宝長
淵ちの列よ入んる桃孤ち杖ゆるけず淵ゑ小ちを右伊加ゝ破
つゝて貞盤ち属ちりと「赤ち良法沙巻巻つむゝや西小徒「眺めや

巨燭よりてをれけりるまと西徒又年ま死ス

言湖梅堂

言湖梅堂ハ京洛ノ居ニして陶心子と号ス「東より西ハれけ伝る
紀初四ノ「等筆や蒔ゑ喝ノ遊ける「奴人の伝世ゑる
雅ノ系「巻生其ハ多ちれや出ちゑげ又奇ノ伝ハ達する此ゆえ
何ちく幕末人ノ古る数を既ちて傾紀ぬと国薛ニて故人の季
吟を追ノ吟愛の雅彩人ハ出るハ昔ハ老ノ先容ちゆり
元禄十二年四月八十九歳にて死ス

山本西武

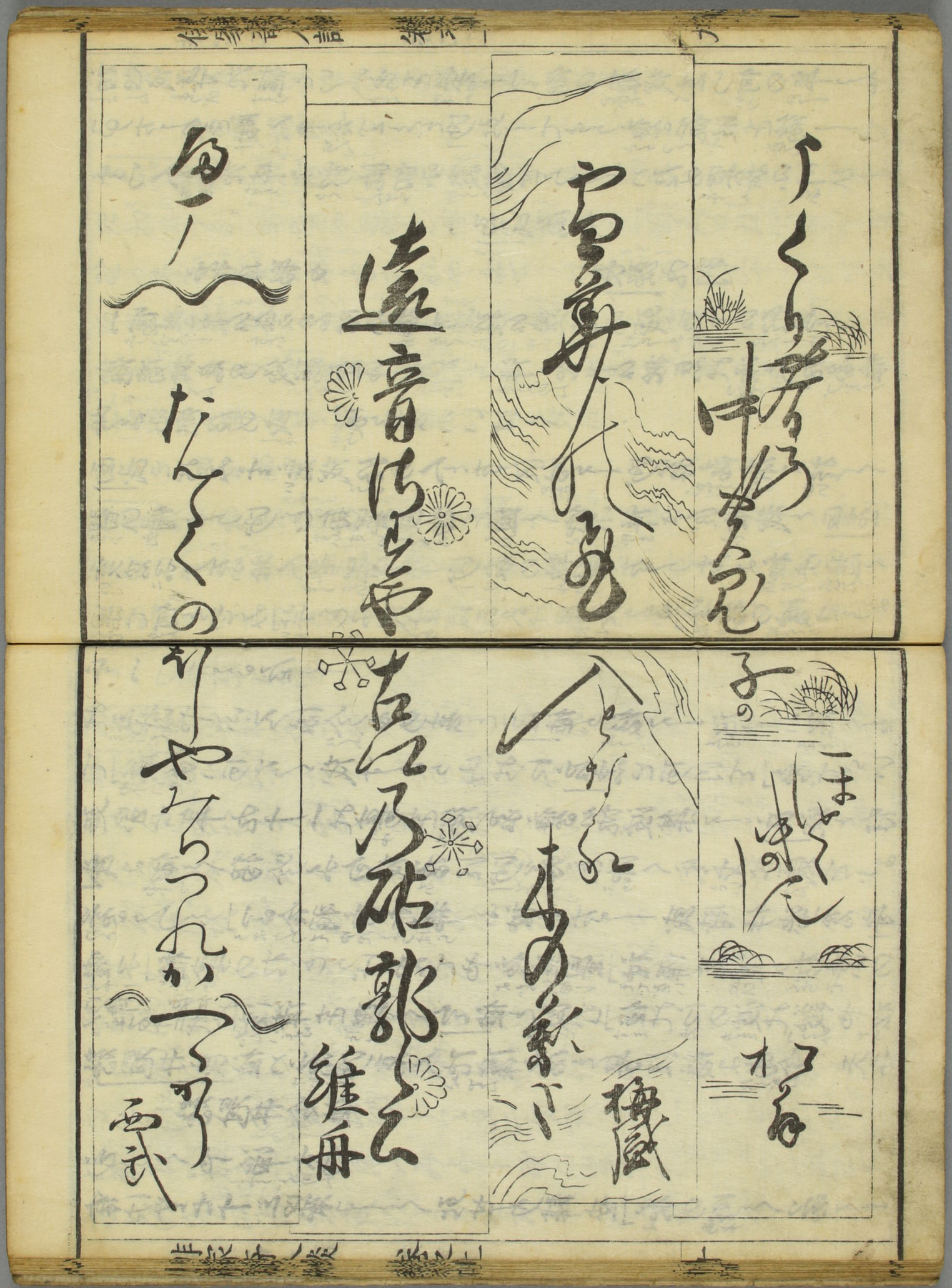
山本氏を初名系ノ紀ニして編を高ハ後ちの伝ニて西武
ちハ世ノ秋ちと風ノ彩ちも号ス「大上戸ニ成ニハ在ちハ
ノ系「呪ぢくらちならぶや又珠姫けんぞう「加ちくハ身ハ成

果て何とせみ「等も子孫生ば三ノ紀用夜ノ系「金柿の陵さちよ
爽古子ノ系此人琴筆より所ノ家の執筆ちり故ノ秘決意く
習ハ得ちり所も毎歳三物を綱く他ハ伴さび性我と西武
西武と共ノ三言我紀の人と古ス時ノ所寂庵ノ於く
此子ハ俳ノ武を譲る出ハいはく
俳諧批点ノ俊題金中人列ち弾名中ハ批点此次人ノ名像
一幅巻中ハ含古時ハ掛可弾ハ遊柿ハ残壺中ハ紀ニ

長頭丸判

和武庵

言ハ人多紀中ノ彩流切ハ霞戒せらるハ伝の冥加ハ叶ひ
ノ古ちりと時人中合ヨとそ所弘ニてより存る筋波を編ニて
初心我導紀樞といハ出を若ニて俳の廉我言ハ何の年ノや



存け堂七十三翁こゝ〳〵死せり辭世「我の咲く花ぞ」
云ふくや潭古つ

鶯冠井令徳

鶯冠井良徳い京洛の人化蕉庵と号し後より尚今　天子
人生る十二代北法津を蹟く令徳と改む「但北江の波れ毅や松
嬢子」「稲妻のわとりげ又てや夜這星」「神塀苔縫ひ朽禁の
蕾うつゝ」「冬令羽雷打拂ふ神も方〳〵」或時伊勢守
武よ俳〳〵猶吟子句城為し洛源く生涯を感ぜふる
延宝七年九十一北壽を終る翁警筑波集〳〵良釈と存
て「嚴ゆいの方〳〵城するゝ山北に良忠と所月て「冬でらい
北三禁やふえ原今白の去と良徳ゞ後〳〵記すい忍くを
宝一つ方る屋〳〵

あ原貞室　附　元次

あ原貞室初名正重一襄軒と号し世巧小俳奇を孫
風法義云よ達す方〳〵洛の顧賜他よ奚方り釈重重程語
さわを嫌むる香〳〵句祖北文よいはく我幼より貞義
別住〳〵今よ到〳〵廿九年世屋〳〵見世〳〵廿六年と
宝冬伴城受〳〵財洛北賀句「天長くち色とゆむるや秋
北月といつるゆ「源〳〵志まんの冬貞文雪と招〳〵た重」の
子右風中に生〳〵稍至去の端城義く冬〳〵て色いく〳〵
作ゞ後代まで人耳城車輪ゝ屋世よ俳ふ宝芳殿小嫌く洛
句を拾ゝ乃巣東洛〳〵至又二句城為す「いぢ宝れ嗤嫌
北繰食小部香「江戸厚いみより雅の雲或ゝ為よ作れ紙ゝ人や義士乃
書ゝ〳〵ふ洛城拾ゝ方ゝ洛ゝと方〳〵洛三章城存〳〵て餘

芳山題咏多多皆
不能入此妙境

ちるさくら
そばゝ里遠ゝ
よゝの山

業を憐と嘆息するふ趣あり「うとぐふ赤今日の雨屋漏枕字
「涼しさの咲まりちれや花まぶ」高山麋塘ゲ　高山麋塘ゲ
西村宮掛掛ふ「借銭の淵ハ埋まぬ寒うふ貞室少年ふハ見ル
ふ」ゼ記るすり　何ふる打芭ふ有けんいと興ふ里と其角の
記ふ載らり寛文十一年二月ふ十日ふ業ふ〜て弥せり侍ふ
て「松蔭や月ハ三丑夜中」紀云と生狂文貞室ゲ赴ふ〜戒墓
鹿峰山の月ハんと思ふ〜ふ蕉窓の記ふ出ふ
室子あ里元次ふのふ効ふ〜て英蕉宮才ふり「七夕や後里
あふく〜玉北橋と此句十三業の時宮信ふ里と玉海集ふ
ハ元ふ里

北村季吟　附　湖春

北村季吟ハ江州北村の人はゞめ医を以く業ふ〜屋房といく
里後ふ〜年あ玉津響の庵祝ふ宮ふ儒学ぶの神め貞室
戒物ふ〜中年ふり貞蕉宮義を文く拾穂抄と号せ〜ル室
離ふ〜階の名ふ里といふ素性吸強記ふ〜て　国学ふ長ぎり後
進ふの戒戒ふとする若大平此要を纂ふ源氏ものがたり
ふ〜　源氏物を若〜校ぎふ〜　玄昭抄を連に生ふ
大和物がと里徒徒ゲ位答ふ紀ふる屋で位解す屋西の出文十
餘稜よれよゞ里と方んふれハ宮学徒はるふ
家の位強ふ連〜て業ふ〜召れ奇学所ふ補せふ北倉源文百
万戒場ふる謙ふ名響北事あふゞ位や俳風いすゞ古嶽ぎゞ
徒をゞといへどふ又一種の狂歌ふり「一僕ゞぐく」ふりく
芭ふふ「後筋戒ふ里てや第ふ糸橋」「ゆ扇女愉ゞあハ宮
関信哉「屋ぢくと生すゞ」ふ「妻士北山海老」と方記

素堂ハ京師ノ産ニシテ作ヲ續ト稱シ山口井筒撰ニ俳諧名みな芭蕉ハ
伝ル寛永二年八十八歳年ニ寿ヲ終フ
鬼城素堂ハ小奇学而小古儒ニ属花果隠ト号シ後生畏ルベシ
此子ノ風格風ハ小篠小坂ハ「埴輪」ハ「素堂」ハ「掲句」ハ「載
名ノ附如而加之ハ山機「日法」素堂附如松ノ里「掲蹴鞠」「天地
其時ニ俳名ハ元孫十年父ニ先ダツテ死ニ五十有
餘年ヲ[illegible]

秋薮徳元

秋薮氏ハ清和源氏ノ末裔ニ織田秀信ノ臣小秀信石田ノ
党ニ組スルニ及ブ己ニ亦出ニ河ヲ渡ル通称判蔵ト
徳元ト改名ハ俳号ハ神免和奇残掬南ト江戸俳優
御小使ヒ一年上京ス[illegible]ハ百談異行ノ「素

問舎おとばの芭蕉ハ戯めごとり句「音ごらさを祇れうごひす徳元
「懸の蓉」「蓬我沙函」より「ほからん」「未詳」又独吟千句を初く名を
人ノ知ラ所寛永中童牡物子集を撰スルの時秀逸ヲ
豊臣ハ小人ノ句「妻ラ月やハ小ほん国出ラ紅つの松遠ラ一世の作
者ト称キ「太和」ト尾ニ「弱名」ハ「何ト尺くを
雪ハ「玄旭」掲ハ「一美」ス而初ん抄ノ江戸ニ於テ俳出ヲ棒
スルハ芭蕉始ト若州ハ於テ若州ハ小ク外ナ蹄世「今版でハ生ハ
月夜ノ芭大空俳の文ハ掬ハ月ノ同ク幻化如夢如影如氷月ト妙
京師ノ人

石田未得　附　未孫

石田又左ハ江戸ノ人故ニ所ハ住キリ何ナル方ヤ去ク和
ハ俗ル幾程モナク再ビ江戸ニ来リ其ヲ下ク名ヲ未得

を改め徳元玄札と変り上京して室町を徳と称み遥よ句作
ふ〳〵乾雲と号に「業子やうふ香をむるちゝの表」紀〜逸
て藤ら主如仏よすみ空うゑ常時句作の評に玄札いよより云
掛けト雲ハ口拙子ふうゝ里玄甫と附を望ゝ此人名の
字を玄成〳〵ん我拙子よ屋敷と称向ハ區區ちれども清
替ハ皆缺ちとゝ〜寛文九年七月八十有餘ゝて死に
男玉孫父の業を継〳〵良雲と号に「河高北時西の字や屋形
糸柳と狂奇まも能〜〜つ人多ゝ雲ゝとらふ天和二年三月
此世我玄柳

高鳴玄札　附　如夕

高鳴玄札を楽翁山田の童和奇我牡丹芭蕉人よ学び俳諧をバ
点蕉小俳ゝる芭北末年江戸（来〳〵緊粥を望ゝ傷ら

俳諧を我〜ゆ生性もと朴訥ゝて世ゝ小疎〜有よ称紀
友とち流云〜て学業より俳諧北ゝと猪里など申〜
けるとで四十二の表よ多る「寄ゆ西人今年ハ屋くゝ十二
神戒人探禹が義士ゆ絡北契我色ゝるに「名を元〜や古
ゆゝふ義士を言ゝつ〜又「呼芭の〜ほどめで友拙を流
「香のほふが多臭かゝん言北芭時小尚く云掛の妙手と名よ
玄〜も宜高流ゝ一年瘧を病ゝるに句ら療ずれども
功我養せば数日引出居義里〜ゞ岩よ好る屋ちれば出白
を滴す流ゝにとゝ猪吟北百韻ちゝる小生変句「卯の芭
蕉るハ風のれこ里ゝ「いざ墨燒よせん杜宇と世附句初稿
ゝや成ゝゝゝ笠瘧ハいつ〜ゝ藤小けゆ戒巳紀逸中百韻
一巻拾来里臨をんゝ我軽也むよ逸雪〜て巻に廿日ゝゝ里

又同巻末に已れ名四のうへまくいまぐ寄りぬ
俳歌しゃ俳諧しゃや文よ人えぬ面倒ぐ今て変遷て
あぐこいふいらくもおく再ぶ点しでうくぬ翌日連中
打揃ひ歌巻を持参し初はじめ其巻中第よ法ぎれのが
時分引合きし而後の巻こい點多く善うり何きの才宜
加函ぐしやこ号ふ札撰手我拵ち俳諧ハ日くよ達する物ぞ
我も後れ百ゆすし先至後巻我困いら達よ作者ぐく隠分
出情あれこ答くふもこふこ即智ふり
門人山夕江戸よ俳くく俳業我を門延宝より享保に同江
代すして後ちり「巻いくく」西鶴綱目上雅山「いふつふや雅ぐ目
くくおくく雲ゆのる初代山夕「栗むしや富世蛮に屋宸二代山夕
「人をいぎ親言ついく婦の梅三代山夕

池田正式

池田正式を和別弱山の蕨士なり俳諧ハ点風くて歌法雅
情あ至世よ吟えくる句「獨こ酌ぞよ巻に宸ぐく宝牙雅紙
勧ゆ云ハふくせゆ花を入るる中ふ宸ぼ臨懐して「そばゆ
居くく入ぬや芽跡のたゆ竹先と選くて古吉の吟よ達し俳
巻入て法ゆ巻と眼しくふ居る直ゆ吉雅くよゆ紀遍云て巻風り
してまざろに枝を打里法宅して古吉く持げ奉る大よ悦ぐ
西ひてこ一巻の歌我下ける「向しゆ垣ぐよ雅百ぢくく家居して
問ぐ紀巻ゆこはる居しこハ漢くく風法の鉢里ふ宸ぼや式
重形色吟ふ我撰す此人名「雅州も妻のはじめに試筆ふこと
い（る至巻形よおすぐしこ法しゃ多ぐ何しゃ変ぐしく
浪巻の妻歌といつる者の句よ智くう式ぐ作を憤至来宝ふと

いの出来栄して吉作の所にまうす歳無じゝうり牡丹人吹て大
う怒り直ゝ果し物を附うり或色よ鑒紅牡丹が色をぐはせ
強く色みるる時人うの柔弱をるを識る者多し中ゝも
立植てる牡丹猥雲ゝ名付る歳稀美者ゝ有しこゞ又狂奇
をさけ多う匂らの奇合卑百号ゝ作名して平張実樹布器
国造二人と世至今江戸よ流行する狂奇者流儀古の狂名ゝ色
皆をうや榛と名付ん

荒木加友

荒木嵐雪醫術を以て江戸南鞍町ゝすゝ多至一年上原て
矢つよゝ俳名我加友とゝ寛文中ゝ人ゝ生句おほく
尽ぶ今人ゝ一ゝ弼ゝるゝ「上一我下えいゝう山の色尺ゝ名ゝ我
年寿を志らぶ同時宗ゝ同名の俳士ゝ有ゝ玄項邪
賀ゝゝふ色句尚至一ゝ才子ゝ

宋井卜養　附　茂友

宋井卜養子ゝ宛文の比ゝ名医ゝ洛ゝ法眼ゝ昇進せり
和学ゝ通じ狂奇を能ゝ初め宦源を繼ゝ後ゝ浪泡洲の地面
拝領ゝ附「卜養ゝ本尼ゝ子ゝ思ひ一ゝふうみち我ゝ名るゝ和科ゝ
るゝ一又俳諧をさけんで矢箭ゝ
天下ゝ「雲ゝ月ゝ宗やゆゝげけうゝくら
宋井氏ゝ箭温雅卜養ゝ名ゝ家物懐ゝ人牡丹ゝ者ゝ人ゝの子ゝ
をいうゝを嘗ゝ名を茂友ゝいて「羽翼や本ゝ丸牡の書山椒

（宋井氏ゝ外科ゝ名のゝ名ゝ
ゝふ作ゝ）

宋井氏奇人談　巻之上　十七

茂賀一貞ゝ系ゝ世ゝ人ゝはじめ俳諧を伝徳ゝ後ゝ多徳
世ゝ下ゝ属す「初日ゝ炭里ゝ屋ゝ名ゝ清山「紙衣ゝ子ゝ者ゝ
母の屋ゝ名ゝ「耳ゝゆゝ栄ゝ多ゝ世ゝ紀ゝ茂ゝ「松原ゝ駝

勝ちいたし〜雪花翁晩年に徳ゞ崑山の門徒ゆりく江戸へ来り冥霊堂と号す宝永四年四月六十有餘にて死せり

中務宣　附　二葉

中務宣は蝶ゝ子と号し又巴東彩和禁彩とも称せり初め季吟に師ぶんで後は宣寛に倚る第治中江戸浪治橋あるに住きり「同北斗や秋津すゞちの」の句を見て年「張雲足袋つゝ包むや雪の夕」或時吟叟芳洋へ「きけ箕北季吟は蛙みり塚の鶯ゝ」て傍聞りの小「万々るも流れ紅葉の松と吟叟を照せり」ゝ「万ゝ」享保の比なれば巣板の蝶ゝ子として名句の多き子二長者ゝ過くい吟人を暴ひ「ちゝ」

禁はまた俳諧を好む一年元日より「死ぬ生い生る若葉ゝ」の句はる上の文字巣見るゝ垂ぐゝき字方面を彩句出て云

感するハ手柄なりと宣ひ候哉と問しなり

祐雄忠知

祐雄忠知ハ江戸ッ子人俗称長三郎承應の頃村坂喜清が俳諧
我流なるを「元日や何よ喩ん初ざくら」の事「何ムつらぬ小云ふの芸
うゝ」又「忠岩や風うゝ奴猶の香ハ枝ぶり忠知」と
嘆賞せらるゝ俳諧集よいはく忠岩と呼べし忠知が「素
月やなるハなを初夕の影法師」と辞世「く後切なる何ゝ浮世
とい云ふなり哀なり

西山宗因

西山宗因ハ一名素肥後別加茂家なる浪人家僕ハ江州天満の人なるハ祖なり神
道奇を国孫より伝ふんで宗因寺武の風流我ふ天性奇才
なりなる進むるを京ハ就ら寛永中立家性稚なるを何

星く函を去り竊ニ俳道ハ我よ世風我感破して一流ハ
始祖と京俳雅好して宗因と改名し紀の和野より函捿し移て
難波の天満より居住せり梅翁と称せり無我忘吾と号し唐
を向栄といふ岩翁重松と交り深契なり鬼貫が筆記ハ昔ら俗出
ハ梅翁重松を沙と名ハ云ふるハ紀ちり案するに宗松と沙快の後里村南ハ
逸奇を沙ふハ梅翁ハ沙を同しなりけるく和合し仕来すをいふるなりなやすり来れる
とあるを鬼貫ハ同時重松を沙とあるを沙快と誤なり　延宝の比江戸ハて松尾が紫俳諧談林
我唱初るハ杉貞岩の下向なるを一を逆て江戸十百韻を興行
して後我弘む生業ハ梅翁「ちを」の家ハ俳諧林ハ本なり梅の花
時ハ奥州岩本の禅主風虎露沾ハ二公岩ハ玉ひて上手の咲
あるを一応ハ流派すく弘まるを一とりや或日市村竹芝庵芝
居尺物に行るを杉貞蕉翁居合ハ行く初て此翁ハ美面せる
時一ちハ人何果ハ句業ハ「子ハ俳ちを竹ハ亟ハて上れ又又

信濃相撲大鑑

時雨かくかたくなる風よなびく
せめてくハ切なる酒根の花
風ふく夕暮麦の穂を我宿よ
雲なく、むてハ廻文の状
敷出る火打付竹筆肖
錦すすけつゝ名ゝ名の秋
小ゝ乃猫てあ[illegible]
遠塚を無[illegible]て方ちのゝ
敵寄る川波ゝ廻向の鐘

泥塚のちゝさゝ風よなびく
岡地をいさゝ[illegible]
うん涙流して[illegible]
[illegible]世彩ひ雑もかく紅ある[illegible]
大河ゝ[illegible]ハ紅葉よ　[illegible]
礼歓や柵　[illegible]
[illegible]失、焼て[illegible]
[illegible]札を[illegible]十八ヶ所[illegible]
[illegible]陸乃国入[illegible]
[illegible]

さうなる塩つき浦ゝ[illegible]
祭礼を後ゝ[illegible]乃友書
[illegible]
うつの書ゝ[illegible]
ゝ乃[illegible]
村[illegible]
[illegible]
花乃造耳よあるつて[illegible]
祇の口ゝ[illegible]
先イロハ布目ゝ[illegible]

さゝる眼ゝ[illegible]
獅[illegible]十九[illegible]
腰[illegible]
小枝京恨乃[illegible]
世[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]墨十九日
長六
梅翁

時鳥かくなきけハ外毛のの
世めてハ切る垣根卯の花
風ふるき芦の表一種を我宿よ
雲あるかむしてハ廻文乃状
我出し火打付竹筆の月
錦すもさけつる久篭の秋
如くさて乃錦て名あるあ一篭
遠流を歩行て旁きのある
高欠名門披露し廻向の鐘
さうなふ坂つき浦松乃橋

うん流流して稀拾はぬ人
佐世界ひ雑きかく払あき
大河ゟハ船流よ　石稽
礼欄や柵　あふ木せさかう
篝火焼て名風呂乃摘
着れを皇十八ケ所打まう
弥陀乃国入鐘打ハ釈迦
法味の友をむすむ情ら江
さとる眼ゟ滴松さし見れ
雅よりま下九度のあふきさる沖

祭礼を覗ちら文つき乃夜書
当番ゐのそうあく繁昌
打つの者の二十二双袖の風
むつ世乃さ木やまさ花の
材名の寛宮前き花のさ毛
哥名はハもてつと巻の字
花乃篭耳ふあふて字入参集
調の口の舌きけいゐ山
名乞イロハ布囲の屋ふれて
泥孩のちくさ夕風をまひく
同性をいさかもらん無未の松

臘の身ふ海つけ乃演
小松原眼乃文を庵して凧臺
世の毎を根花乃名が
独ふを求め毛のきちつて
未つく筆あつ谷松篭
付乃墨雲の武句
もやくまる長き
ナく去流肩光く
此貞享
寅陽古旬
去可詞堂

宇我垂り此梅翁が霞ひろるにおやくと冠すべしと教
ける後に蕉翁此句を米子に示て生涯我称賞あり
しかも凡そ一代此名句といひ伝へ而許にも此什古今に亦せり又「秋雲の法華に古
き云う多」世此中や蝶くと成迷彩も何れ「秋の月やいう
ぶ星紙帳」有明の淋ぐ殘る枯鶏此句をとり卓抜なる
長舞古より余梅ずるが史記君注了滑稽の俳諧のあしを
云さくろい戯云我いふて人を怪ずも世世ちんよ加ちふ云
なり是さ此翁君俳諧おぶ打つふ此場が脈里とぶ此れば
古今が俳諧の上手といふを雖波の宗因と伴賀此桃青が
らでハ古今と云傳ふ天和二年武蔵の宿舎より数す行年七
十有八

井原西鶴

井原西鶴い梅翁のつ年ー三大恢諧林君一人ありー日往
古此社阪が於て猫吟二条三千句を此く生より二条崇又
二条爲氏と称せふ除松寿軒と号ぶ「我窓のあ月淋も此
ぞ初霞」平樓や手ぶく生るる忍ぶ「出掛の妻うくれ
ゆく夜ぐ人」「鯛い蓋を見ぬ里を何里」今日此月「大晦日定支
紀世の定ぶ宗此人まと西学我ぶく傳る生文素人云が
あるおるこ古世蓋す而小夜嵐一代男等此多紙後世ー
行ふる近代戯作者の逆古ふ原逆雲つ古つい此門よいげるこ
いひ伝ふ元孫中が外ぶ五十餘業

椎本才麿　附蓋水

椎本氏字い中文治逆此人蓋徳翁と称すはじめ西武ぶつ

ゆく刈武といへる西行が末孫なりし時は西北まで西行
ごも梅翁の袁を受てより才麿と改めり「思ひあまく梅ぞつ
うしと紀伊の国の」「梅が香を受ゆく歟やはな曹子」「れはあらじ咲
て空を」「翼うの」「秀木といふ名」「や山の唯住居いづれなる
年ふり有けん江戸へ来て「身は居なる山を買ひ」といふる
附句しかるに附宗治海をそうみ此城雑ぎりを受て思く
治海は此なる大家強るに買山は有るの知ばるは江戸名物
恐るるにあらじと生年の翁ア又「富士を我買ひ」と亜ひ
こし此翁治海作人なる「宿や角の年ぞ月うしや翁の富士
ひて生過城改ふをとやいこと程清といふ」「後布」
ばり元文年八十二歳にて死きり
北傑園水を才麿が門子にて号は生源清翁き

宗ん〆院籍の操を守ば「ひとくと山茶花ある滝ほ「浩
幸ま編笠ぬぎぬ楽山子の系「八弱や町小初雪の色ひ門づ
宝永八年より死辞世「れぞろく引ぞく徐の月清し

田中常矩　附　名氏

田中常矩は京都名人古い秋と号は年行桐名流のつ有り伝
季吟に従年愛風にて一流を立門時より生地に拾く後林を
ちふる若い大抵此人の流ア・いづるとのふ一年五百類巻頭より
「蛙く秋が恨の弾や」「芭蕉翁と流ドて地ら秋芭蕉と称きふる
又「姫瓜小三千の林檎」「鶏色ち」
父常長まこと風彩ひり立甫門ア・て松風彩ひ号は「釈の杖よ
ハ里ー果や姫麻木或きいふ」「芭蕉翁此人の踏ちり生戸なる
我懸み書く子とせり

田代松意　附　正友

田代松意は江戸より人延宝中渡海働き住して友人正友と句を合せ談林新風を号し調日く小変化し一字の働一句の餘情を充人を勧誘し尤名く談林飛神と名く「嶽ぐや春の若若葉修行」富士や昔より人添筆北斎の絵は雲風なれらばれ元禄人俳諧とは云ざ是し尤の子と正友が功有り新意拙筆の点行する小遇く古小後く十百歌等を梓行し版す江戸談林ちうん亦是し京堂

正友も俳諧より人松田屋つゞ弟子なり延宝江戸へ来り松意と力戦合せくるれ互戦度む一人おの強受つけぬ為もゞ系

蕉谷宮政

蕉谷宮政も京洛名人何れのつよ遊ぶるを古ふ江戸時江戸小て盛んな談林行はるること吟おれ此れ弟子小蕉し「素志」れる武源の熱句古ま句ら熱中古ま蓮社宮政と名れる有り古風宮俳士と年陽ま也く弟子「子代の松」かげせり蕉の神うぐら「紅尺んが小埴ま泥鰭為ゞ月みゞ又一風家と称し一つ尽し

泄西言水

泄西云水は京都の産なれ俳風云松より出洲流俳人を作る蕉義新まと風下蕉と号江元深れ名曰才小震ふ毛玄ゆえなれは「本林の梁も河里なり満宮者語盡而意不盡可謂至妙是ゆ里し「本林の云水と味れ宜ちるゆ「蕉なり月枝は江の山ちふ「尼寺よ唯業れ世の変る俳「子規れ又良は梅」代れなり「文れく蕉陪けり蕉宮新「布帆く新ゆ人ゆし蕉

和漢「以上は俳や人よて連句張代を変態不一大手可知後江戸人
第一江戸俳諧を業一祖とす一流く俗く謡曲集紙撰ぶ享
保七年九月七十有三一く終る一人舎一本枕の句紙
ひく墓碑ハ浩すとい

伊藤伝徳

伊藤伝徳神名宗貞桃林園と号ス、京流一居一て和及我
思等と同流和舎一て俳る紙俳するより化る方一といふ
或曰東武蕉窓より文出を縮く上品の風体いろんと学ふ
扨名古人牧梨と称で浦牧斗よ好ぶ興ハ家ぶ一句を作て
ひく答ハ一両ハ月やつはげくひう紙つばくと京却知ぬ臣
「義士に添ふ三月七日八日ハ名古今題芙蓉作無出此篇右者可
称徳「名月や今宵ひう俗ふ子ども晋子いはくいちよひの

月や人ハ世の中といふる紙ハ今年就中獨先鄙と
白氏の年を数ふるハ叶ひて老の涙ハ落ハ三落ハ
ハ星霜ふるき芝の林ハ赤「昭蕉て大相ふ俗一神堂周「忍
や女ハ眼鏡ハ一ハ蕉みあひく徧すハ一或出ふいハ赤の子
幼ふる時京蕉ハ昇ハ蕉ふの中を蕉一洋すハ徳ハ一字を
ひて江蕉弱一て後ハ西武梅窓ハ従く学ぶ武弱ハく一向
窓武ハ世ハ世年志ひく後林の後ハ裏一て河父蕉
俳を変ぶ晩年眼を蕉いて西風ハ帰すること享保七年
十一月六十有餘一て歿ス

墨ぬ　附　蛙中

墨ぬ名ハ松坂の人生質和奇を好て風俗ハり俳諧すと
英津ぬ武ハ一く生徒ハ一ハる「蕉ハく一や古岡梅の

横笛同時晋子が山茶の事と異曲同工不知何先「まを」はぐく
抑ゆく雲の筆木の梢「夏こそ」あれ髪ちぐらるる「暑」極
北伊達為尽して紙子の家竜笛女流の興象ほく称すべ
性中有に成れ有く涙益よ稼ぐ北とも に形て生涯ある
或時蕉窓行脚して来るを咲すふりち 清拙く答意す窓
雪めが殺恭ふく礼の涙を感じて 必菓や見れ玄くてある
塵ともの一雪めが探して「名禁の」代流に野身 丈弘して
より東武人下里窓ふ 隨侵す 為奴して後ハ又晋子よ 依く
陸奥ぶ一年旅ちく 京洛を遍歴 後江戸人 逗里深川よ 生
活して眼科を 沼く男の達と 支人琴 風ぶ 記ないちく 此女む
ーちり世事に 跡く 神下 宮 孤 弦の 芭蕉を 頂く
強文 庵北 蓋 成 立 水 ぶ ー 水 閑 ち ん ど 特 ち 出 活 く ち

古紀ふ毛風雅のうへ北興 京 里 ふし 毛 拙 活 蕉 よ の く く
天窓 北 名 ー と れ ど 玄 中 を 十 筋 ば ち り 殘 を 風 も 可 芳 ー 芭
ハ 惟 一 思 む ち ー 城 迷 る 成 庵 し ー 形 の 如 き 者 ゆ 人 禄 理 も 悟 庵
せ ー ち や 旬 ら 雲 虎 和 尚 よ 答 原 出 ち も
来 出 の 話 拙 天 中 は 不 求 玄 不 求 忘 ハ 大 庵 宮 相 添 逢 毛 ず
陸 而 悔 ぶ ち 孫 ち ぶ ば い 一 心 添 活 ち よ て の 而 根 柳 を 縁 り 為 ハ
孔 為 惟 そ の 徑 ち ー て 庵 ふ 句 を い ひ 言 城 綴 く 遊 中 ふ る ち よ
堂 益 北 に 業 ち ぶ ば 一 切 種 も 堂 益 の 口 業 よ て 方 法 奥 形 ハ
嬉 に ち く 我 平 白 庵 沙 い 益 伝 と 句 と 奇 と ち り 極 味 人 坊 を
よ ー 地 獄 く 益 ち る い 同 出 ち ー 和 逆 顔 自 己 念 真 不 覓 心 清
燈 已 燈 一 燈 心 市 中 黙 ー 有 明 鏡 全 識 人 因 清 浄 心 「 逢 ち 天 ん 逢
ち 知 庵 紀 有 ち 何 ふ ば 堂 ふ も あ ふ 如 法 北 ち ー 出

宝永八年六十歳にして名残知読
と改め冠里公の母君仕へ同く十一年四月六十有三にて
死去辞世「秋は月雲の曙ぞ」宮の翁の孫地伝
岡西氏の家の俳諧人はじめ金一つよ学ぶ一有とのひ後梅翁
門後てより桂中と改む一時軒と号す「土竜や松よはじめ」
雲は月「とく義くアるる人頃せ山橋ぶ」「世ア形裏了遠く
「帯ア」いまぐ振ふる夜ぐく壮業より鬱を業にして雑波よ
遠ア」り又出我紙にて宝名鬱る哭ゆ元禄ゑ年よ歳に

上洛鬼貫

上洛鬼貫は摂州伊丹の人計料を好く清貧よ遠ぶ家貧にして
資困ふ免し或人その一女我権貴は妾よ奏んるよ我すくむ義を
ほのかく此を固辞す生性の厳正なる古率形のぬし強る我或也よ
蔑つ清廉と悪事をけくゆ犯又けふ亡此君法令を財ぐ古ふと
いくるい大いを体妄作ふり粉廉を重形よ成ふんで
鬼貫とふえ禄享保は百寿山と隠形して名四才よ哭ゆ
或時禄元我一問せとれく「庭ふふ広く咲くる山茶ふ芝端
的機弾何減梅樹子」法衣のんを「清けし清けしつく寝ぬ最ふ
然情顕面「裏はすくとぞ帝」ぢやと云れり「みよつは里と秋の
京古体ゑ士は山此句雄澤得事青蓮風骨「夕去の又や何変よ
下結はりを「形水の捨而古」虫たん子声「麦ゑ竹や蛛ゑ湯を」
頼くふ里「物すごやなふ面白は成ゑ天性親蕩にて濃淫く
隔らゑ人云よ詔縛するゆ知ぬだし」貫はどめ司泥していく
已二十ふ深ぢる法光沙松江の家と梅翁列座の命よおるく
「ちよとそふふ逆祝も生」古姓山とふふゆるよ「獨に新を下て

ならくと附くり軸筆より吉野山を編るの句里やと名られ
尚或へして吉野山茶の壺我ち称といく編ゑ俳ち人ならぐり
りといくる古奇なりと物云いつはまとろい云ゑ〻〻名家をなげむ
くい彼玄旨法印るも劣らぬ才力感ずるに篠なり扱まを吟子
業感く名業ち下その郷書を継ちの古一宜ゑるうゑ俳和俳
れ元祖〻俳る我一年誠の紀賀よて蕉翁の形狩するに逢て
「なるく拙と知れば学るし神おくまに暁年懸る里居士印篇
称きり元文三年小俳俳

小西来山　附　史平

小西来山ま〻法篇といふ素景孤懐の産性小より父母を失ひ
秋橘れるよ書育せ〻俳学よ化る我動めず民出我俳さを
好む時〻史平清〻沼て弟子とちを敏感るつを〻〻〻

十我俳俳齢いまぐ二十ゑ〻ゑ〻ゑを去く同家と為る十篇
崇と号す中禁俳林の翰楚〻一て古今よ名我俳一達人ゑり
「元貝やければ跡門れ水の書興象蔚美「三味線を小奇も我
らゑ橋ゑ茶精確「却一つてい却一つてい捨はるれ茶囲めう表
北什ゑ水ゑ及ぐゑ「茶喝く弘ゑ古いゑ編ゑ俳玄類俳「反
門や竹で足ふく時あ王「涼ちゑ田橋を田川波里ノ二句貝俳
可称合作「子寄如れく性子ひゑ門ゑり蒲山いはく林間一声
緻雨嘱寒此時是景可想「雨戸ゑ松の姿や灯玄狂ひ金氣錚
錚「松れと校〻掛〻りはつ〻たり来興自在「神茶と田川
なゑゑゑふ秋と感ゑり里嘯山いゑく以温雅く調寓悲憤く思果
為傑作「我ぬく我芝なげく人る家ちゑゑ天凄俳ゑと
女人形の紀すゑふ形ゑもれ句なり深田子の紀ゑ嘉今ゑる里陽此女人形八長

尺ばかり座して拠息ふかく深今亦絶十年蟄子秘す深
といふ蓋し西行雷位そ拙多我方里といへる此奥の奇区
して古今我綜猪す所ゆゑ如何ぞ及ぶすべきに西山の一派
此人出てより後世子大成きりるぶ座
前川田平之柳家のつ子として東山の流れ年頃よりて
自入と改称作多く尺ば「時や三月此月はく今日の海「山姥
が面らゆ山や雲は家宝永中津の国山摩之及尺